

わりをもちながら活動することと無関係であってはなりません。(勿論赤ちゃんに危険なもの、さわっては困るものを取りのぞいておくことは言うまでもないことですが)冷静に考えるところに思いが及ぶのですが、母親と子どもとの二者関係の中では、年齢やケースは異なっても、しばしばこれと同じように、短絡的に大人が設定した目標にむかってすすませようとしがちです。

「わき見」は子どもにとっても、おとなにとっても、時

☆わき見について

として必要なことではないでしょうか。

「わき見のすすめ」を私は、心理学でいう欲求不満からの逃避と同義ではなく、「思いつめ、考えあぐんで一つのことしか見えなくなっている心、動かなくなっているお互いの関係に気付き、見つめている対象からふと目をはなして他の世界を見ることによって、自分自身を変化させること」として考えたいと思います。

(西南女学院短期大学)

田 中 平 八 ☆

「わき見の勧め」を書くように求められた。ということ
は、私は、日頃わき見ばかりしているのだろうか。

一体、わき見人間とは、どのようなタイプを指すのだろうか。私なりに想像してみると、本来の仕事や勉強は適当に

しておいて、直接には関係のない起き事のあれこれに気を奪われている。さりとて、それに熱中するわけでもないといった生き方をしているひと。こうした人間を想定すれば……なるほど、私はよく当てはまる。

では、外から見るとどう映るのだろう。ほら、皆さんの回りにもいるでしょう。何かが故障したり、不調になると、どれどれと覗き込んだりしているうちに、直つて（直して、ではない）しまうひと。くいもの屋の情報とか、動物の名前とか、雑駁な知識の持ち主、このひと達は、おそらく、わき見の成果の一端を見せているのだと思う。でも、それだけのことで、本業には役立たないところが、わき見のわき見たる所以であろう。

内側から見た特徴はというと、話は跳ぶけれども、地下鉄の車両はどこから入れるかという話で、人気者になった漫才師をご存知のことと思う。初めて聞いたとき（あの二人、急に脚光を浴びるようになったが、ずっと前からやっていたのです）、同じようなことを考えているひとがいるものだなと、とても可笑しく感じたことを憶えている。例えばああいったどうでもいいようなところに、疑問をみつ、け、こだわり続けてしまうところに、わき見人間の病巣が

あるように思われてならない。

わき見をひとに勧めるという発想がよく理解できないとぼやいていたら、傍にいた妻が解釈してみてくれた。道を歩いていけば、と何やらロマンチックなたとえ、道の端に名もしれぬ花が咲いていることもあろうし、見上げれば雲が浮んでいることもあるでしょう。目標に向かって真直ぐに進んでいるだけでは、気付かずに過ぎてしまう。それよりも、ひっそりと咲く花々を愛で、浮雲の行方を眺める、ゆとりのある生き方をしたいではないか。

理想としてはそうだが、現実はもっと敵しいのだ、これは私。で、以下は強引に自分に引き寄せての私の反論。それはその時々で楽しいには違いないけれども、雑多な本やら器具やらで、部屋の貴重な空間は埋ってしまうし、金銭的出費だって馬鹿にならない。昔、戯れに本棚一段の本（チャーリー・ブラウンのシリーズだったか）の値段を集計してみたことがある。更に、よせばよいのに、その合計に棚数を掛けてみたら、ため息が出るような金額になった。もっと言えば、机の引き出しや物影に散在している、中途半端にしか利用されなかった器具・用具を見るにつ

け、自分の意志の薄弱さ加減に愛想の尽きる思いである。なにしろ、百ページの本を九五ページまで読んで、そのまま放置するという行為が必ずしもまれではないのだ。無理をしないといえば聞こえがよいが、もう少し克己心を持つべきではなからうか。

ここで私は自分の恥をお話ししたいわけではない。わき見人間にとって、わき見は決して余裕の現れなどではないことを主張しているのである。それに、わき見をするかどうかは、パーソナリティのかなり本質的な部分に関係している、おいそれとは変えられないかとも思うのだが。

親しい友人のひとりに、本物の「まっすぐ人間」がいる。学生時代、偶然、別の友人と私が同時に山本周五郎を読んでいた。「まっすぐ」な方の友人、普段は余り小説など読まない男なのだが、私達の影響を受けたのか、たまたま読んだ周五郎の世界が気に入ったものか、猛烈に読み始めた。精力的な古本屋回りをしているらしく、遊びに行く度に、確実に、新潮社の全集が増えている。そして、あるとき、俺、周五郎の小説を全部読んだ、といった。まっすぐ人間のわき見は、これまたどこまでもまっすぐらであるよらだ。

隣の芝生は青く、隣の柿は赤い。とかく、自分に欠けるものはよくみえるのかもしれない。私には、「わき見の勧め」という発想がそんなところから出ているような気がしてならない。違いますか。

ひとつことに打ち込んで、一定の境地に到達する。私の憧れる生き方である。お互い、無いものねだりというところでしょうか。

話に話ると妻が登場するようで恐縮だが、ここまでを読んだ妻は、わき見と本業の関係はどうなっているのかと言った。私を見ていると、どれが本業で、どれがわき見なのか、わからなくなることがあるそう。馬鹿なことを言ってもらっては困る。お金を貰ってくるのが本業で、お金が出ていくのがわき見です。

妻が皮肉っぽいことを言うのもわかる。しかし、本人にしてみれば、あれもしなければ、これもやりかけだと、いつも不安感に怯えながら、ついまた、わき見に手を伸ばしてしまおうというのが本当のところなのである。まるで中毒患者のようなもの。

実は、申し訳ないことに、原稿のメ切日を既に超過して

いるのです。私は、前から江戸時代の浪人よろしく楊子を作ってみたくてしようがなかった。近く引越をするので、それに備えて切り詰められた山椒の枝が沢山落ちている。結局、原稿は進まないで、庭へ降り、肥後の守を使って削ってみたりする。形良く先端を尖らすのが難しい。私は口唇期に固着があるというのか、何か口にくわえているの

○わきみのすすめ

「わきみをする………」というときは、「とんでもない」「いけないことだ」とか意味づけて「という結論がすぐに出てしまうことだ」しょう。この題名についても、「すすめ」「というところが殊更にくっついていることからしても、概念

が好きである。比較的形良くできた一本を噛みながら、部屋に戻って、原稿の続きを考えていたら、何やら口の中が痺れてきた。切り立ての山椒の木は楊子には使えないようだ。そういえば、初めてタバスコをレストランで見たと、味見してみようと掌に振り出してなめてみたことがあった。あれはもの凄いなものであった。(東京都立大学)

村田修子○

的には好ましくないもの。と定義づけられていることを感じます。

それが表面きって、わきみをすることをすすめる、という題を頂いて、その立場に立って考えてみますと、「とん